

これは、高齢者が参加している活動としては非常に割合は少ないんですけど、よくよくこの小さい図を見ると、年々これも割合は上がってきているんですね。6.8%の方が、平成25年だと高齢者の支援をしている。高齢者の方が高齢者の支援をしている。そして、約5%の方が子育て支援をしている。これが参加している活動だというふうなところで上がってくる。このあたりの割合を増やしていくというのが超高齢社会の中では今後大事になってくるんじゃないかなと思うところでございます。

● ささえ合いの街づくり

それを踏まえて、ささえ合いのまちづくりというところに次入っていきたいんですけども、高齢者の支援、子育て支援って、じゃ、何をしたらいいのかということですけども、まずは、シニアの方の役割として、よく言われることでもあるかもしれませんが、隣人としての役割。まちの中で、本当に隣の方にどういう視線を送るかということですね。例えば、隣人の緊急時の対応、これは本当によくあることかと思うんですね。新聞がたまっていて、隣のおばあちゃんが雨戸をあけないよ。「どうしたかね」と声をかけたら、「ごめん」と、「転んじゃって起きられないよ」といって、「おう」って、そこから救急車を呼んでとかと、そういうことも、入院の患者様を見ているとよくありますね。そういう意味で、隣の人のことを少し気にかける。それだけでも大きな役割になってくるんじゃないかと思っています。

3. ささえ合いの街づくり

14

◆ 高齢者の支援・子育て支援

↓

◆ “隣人としての”シニアの役割

↓

例) 隣人の緊急時の対応、
受診のサポートボランティアなど...

↓

ささえ合いの街づくり

15

●話し合うことの重要性

あと、病院に行くのに車がないから困っているというところをサポートする。先ほどの基調講演の堀田先生のお話でも、住民の方で話し合ったときに、どういうことをまずしてほしいかというところで、ごみ出しをしてほしいんだと。そして、自分に何ができるかというところで、それなら助けられるよというところを話し合いついていったらいいんじゃないかということをお話がありましたけど、まさにそういうことかなと思います。そういう何をしてほしいか、そして自分は隣人として何ができるかというところ、そこを丁寧に押さえていくと、支え合いのまちづくりということにつながるんじゃないかなというふうに考えます。

◆実践例:引用)Aging&Health 2015年秋号
公益財団法人長寿科学振興財団
「気になる人を真ん中に」住民主体の
地域包括ケアの実践 (ボランティアグループすずの会)

「地域の中での包括ケアは、発見する人の目があって、気にかけて合う人がいて、孤立させないよう人々が関わり、できるだけ地域で生活ができるように基盤をつくることだと思います」(代表:鈴木さん)

●地域包括ケア

そこで、次に、実践例として、たまたま長寿科学振興財団の資料がありまして、そこにボランティアグループとして地域包括ケアを実践しているという人の実践例があったんですけど、地域包括ケアというのは、本当にこれからの超高齢社会の中で大事になっていくんですが、行政の方が主体でやっていらっしゃるだけでなく、住民が自分たちで組織化していくというところがとても大事になってくるかと思います。

その中に、気になる人を真ん中にというところで、神奈川県川崎市のボランティアグループすずの会代表の鈴木恵子さんという方の言葉があったんですけど、地域の中での包括ケアは、発見する人の目があって、気にかけて合う人がいて、孤立させないよう人々がかかわり、できるだけ地域で生活できるように基盤をつくることだと思いますというふうなところ。地域の中で気にかけて合い、そして人々がかかわる、そういうことの積み重ねが住民主体の地域包括ケアの土台になっていくんじゃないかと考えるところでございます。

●ケアリングということ

最後に、ケアリングというお話を少ししていきたいんですが、今、先ほども申しましたが、私、老年看護学を専門にしておりますので、看護学生と一緒に実習に行きます。常々学生は、実習が始まる時には、私たちは学生として高齢者にケアをしますと、私たちはケア提供者なので、頑張ってケアしますということをかなり意気込めます。じゃ、実習の場面で実際どうかというと、たくさんのことを学生が高齢者の方から教わります。そして、多くのことを心遣いされます。

4. 人と人との相互作用: ケアリング

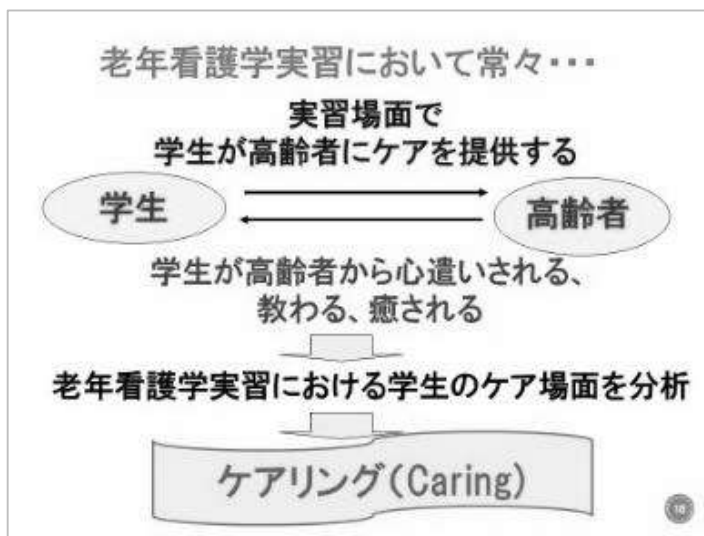
17

「あなた、私はお昼を食べているけど、あなたは大丈夫？ お昼、行っていらっしゃい」立ってお話していたり、しゃがんでいても「腰がしんどいでしょう。椅子に座りなさい」「家は遠いの？ 夜眠れているの？」と。それとか、「先輩が怖いことを言っていたけど、看護師さん、怖いけど、先輩には好かれる努力をしたほうがいいわよ」とか、そういういろんな助言をもらったり、癒されて、逆に優しくされて、学生は、最初、それを、私はケアしに来たのに、そんなふうには心遣いされるのが申し訳ないとかというふうに言うんですけども、老年看護学実習で、学生のそういうケア場面で、特徴的なこういう関係性があるのはどういうことかなというあたりで少し研究を進めて、そこで、この関係性が、ケアリングという看護の概念にある関係性なんじゃないかなというところが1つ私の研究課題でもありますので、少し御紹介します。

●ケアリングする側とされる側の相互作用

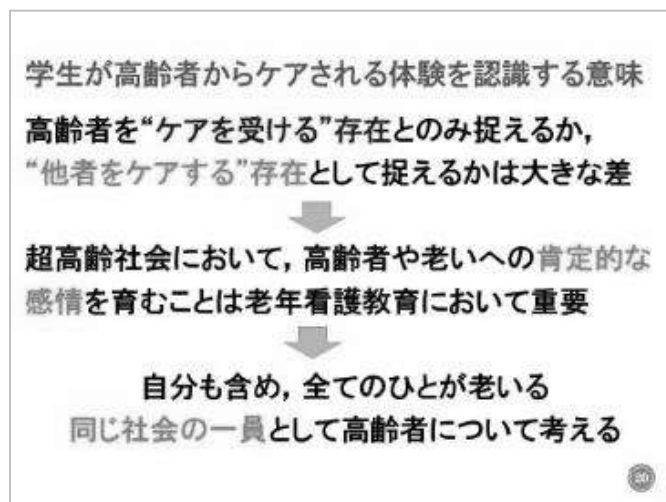
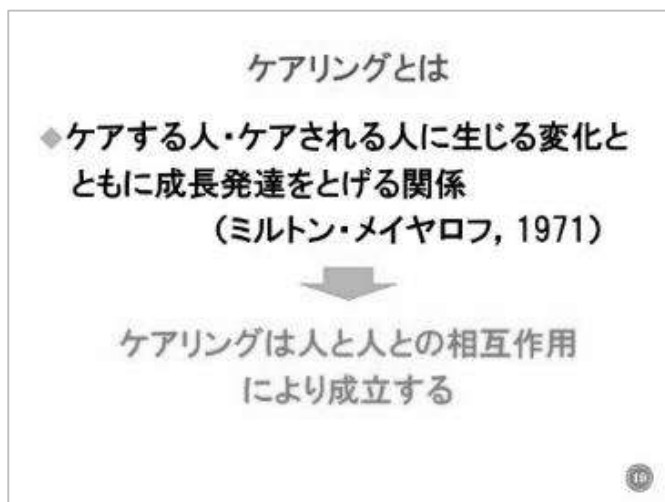
そもそもケアリングというのは、ケアをする人、そしてケアをされる人に生じる変化と、ともに成長発達を遂げる関係ということで、もともとが非常に古い時代から言われていることなんですけれども、改めて、例えば看護師と患者さんであっても、看護師がケアをする人だけではなく、看護師は患者さんからケアされる存在でもあるというふうな意味合いでございます。そしてそこで一番大事なものは、そういう関係性を通して、お互いがともに成長する、そういう関係性を言っています。ケアリングというのは、人と人との相互作用により成立するというふうに言われております。

先ほどの研究のところ、学生が高齢者からケアされる、自分がケアするだけじゃなくてケアされる体験というのを学生が認識することには、私は意味があると思っていまして、それはどういう意味かといいますと、高齢者を、ケアを受けるだけの存在として捉えるか、高齢者が他者をケアする存在として捉えるか、そこには大きな差があると私は常々思っています。



●ケアの担い手としての高齢者

超高齢社会の中で、26%が高齢者の中で、高齢者はみんなケアを受ける人と思ってしまったら、それは社会として成立するかというと、非常に厳しい問題も出てくると思います。また、高齢者そのもののイメージであったり、老いるということを非常にマイナスなイメージだけ学生が捉えてしまうと、この超高齢社会ではそういうイメージだけでは成立しない。ですから、なるべく高齢者や老いるということに肯定的な感情を育みたいというのが老年看護の中では大事ななと私は思っています。そして、学生も、私も含めて、全ての人が老いる、学生も20前後ですけど、自分も老いている。同じ社会の一員として、この超高齢社会の中で高齢者について考えるということがとても大事になる。その中で、高齢者というのはケアする存在でもあるんだということ認識することが必要なかなと思っております。



最後に、まとめとなりますが、この真ん中で体操しているのが、イメージとしては体力のあるシニア世代の方とすると、シニア世代の方が、右側にあるつえをついて座っていらっしゃる高齢者の方、その方と関係性を持つ、ほんとうに隣人からの関係でいいと思うんですけども、関係性を持つ。その中では、やはり私は、与えるだけではなく、相手の年配の方から学ぶことというのはたくさんあると思うので、この関係性はきっと相互作用なのかなと思っております。



●相互作用が生み出すもの

そして、若者、そして子供たちを思いやる。そしてまた、子供たちから与えられる癒しであったり、そういう関係性もあり、そのいろいろな相互作用、お互いが思いやり、支え合う。ものすごく理想論でちょっと抽象的と思われるかもしれませんが、私は真面目にこういうところを丁寧に検証していくことで、この超高齢社会の中で、高齢者とともに生きる社会の中で、どういうふうにケアを考えていけばいいのかということのを常々考えていて、そういう土台に人と人の相互作用があるんじゃないかなというふうに考えております。

看護の立場からということで、以上で話を終わらせていただきます。

御清聴ありがとうございました。

